

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

＜米国農務省（USDA）の見通し＞ 2022/23年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 —

- ・カナダ、ロシア等で増加も、ウクライナ、豪州等で減少し、前年度を下回る見込み。

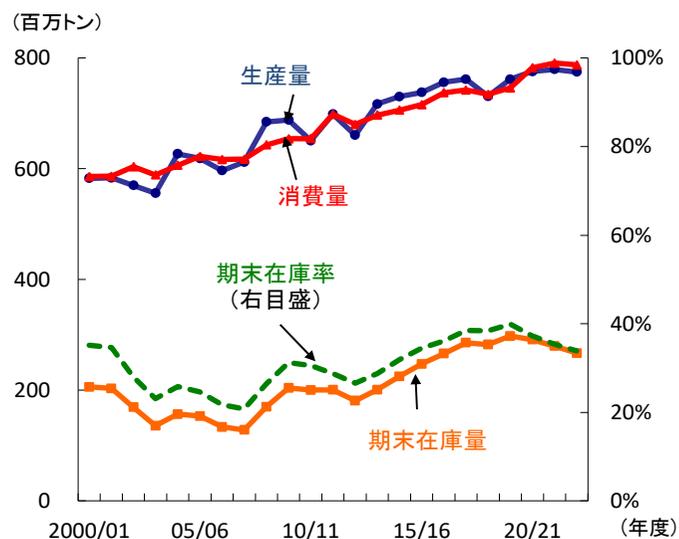
消費量 前年度比 ↓ 前月比 —

- ・ウクライナ等で増加も、中国、インド等で減少し、前年度を下回る見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 —

- ・ウクライナ、豪州等で減少も、カナダ、ロシア等で増加し、前年度を上回る見込み。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 —



資料:USDA「PS&D」(2022. 5. 12)

◎世界の小麦需給

(単位:百万トン)

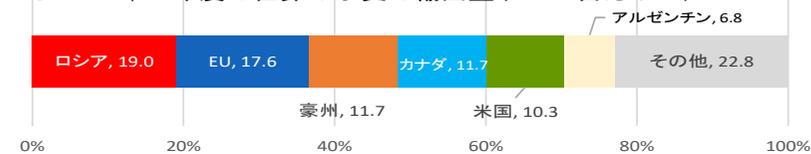
年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	775.7	779.3	774.8	—	▲ 0.6
消費量	782.4	790.8	787.5	—	▲ 0.4
うち飼料用	158.0	161.0	153.5	—	▲ 4.7
輸出量	203.3	199.9	204.9	—	2.5
輸入量	195.4	196.5	201.3	—	2.4
期末在庫量	291.2	279.7	267.0	—	▲ 4.5
期末在庫率	37.2%	35.4%	33.9%	—	▲ 1.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 May 2022)

○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(774.8百万トン) (単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(204.9百万トン)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(201.3百万トン)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 冬小麦は減産も春小麦の回復から、生産量は前年度に比べ5.0%増加

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、冬小麦は減少も、春小麦が前年度の干ばつによる減産から回復することから、前年度に比べ5.0%増加の47.1百万トンとなる見込み。そのうち、冬小麦の生産量は、ここ20年で2番目に少ない31.9百万トン。品種別には、ハード・レッド・ウインター(HRW)が主産地の干ばつにより、前年度に比べ21.3%減少の16.1百万トン、ソフト・レッド・ウインター(SRW)が同2.0%減少の9.6百万トン、ハード・ホワイト・ウインター(HWW)が同22.6%減少の0.4百万トン、一方、ソフト・ホワイト・ウインター(SWW)は同45%増加の5.8百万トン。また、春小麦は前年度に比べ50.6%増加の15.1百万トン。

「Crop Progress」(2022.5.16)によれば、冬小麦の出穂進捗率は48%と前年度同時期(51%)、5年平均(53%)を下回っている。また、春小麦は、プレーンズ北部の雨がちな天候から、播種進捗率が39%と前年同時期の83%、5年平均67%を下回っている。また発芽進捗率も16%と同44%、30%を下回っている。冬小麦の作柄評価(良からやや良の割合)は、干ばつの影響から、27%と前年度同時期の48%を下回っている。州別には、HRWの主要生産地であるカンザス州では、24%(同54%)、オクラホマ州では13%(同59%)、テキサス州では5%(同25%)と前年度に比べ悪化している。

「U.S. Agriculture in Drought」(2022.5.12)によれば、干ばつ状況は5月10日現在、4月よりわずかに改善したもの、HRWの主要生産地であるカンザス州の西部等を含め、冬小麦生産地の68%が干ばつ状態となっている。また、デュラム小麦産地は、76%が干ばつ状態となっている一方、春小麦は、生産地の35%が干ばつ状態である。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、輸出余力の減少と価格上昇に伴う競争力の低下から、前年度に比べ3.7%減少し、1972/73年度以降最低の21.1百万トンの見込み。一方、2021/22年度の輸出量は、輸出が好調のため、前月予測から0.5百万トン上方修正され、21.9百万トン。

2022/23年度の期末在庫量は6年連続で減少し、前年度に比べ、5.5%減少の16.8百万トンの見込み。この減少で農家売渡し平均価格は史上最高の10.75ドル/buに上昇した。

小麦—米国 (冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

(単位:百万トン)

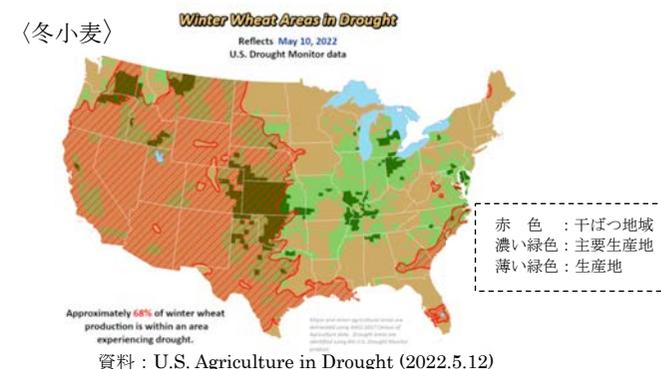
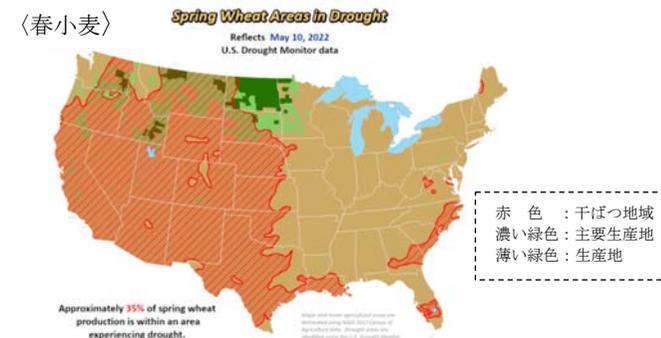
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	47.1	—	5.0
消費量	30.5	30.7	30.2	—	▲1.4
うち飼料用	2.6	2.7	2.2	—	▲19.9
輸 出 量	27.0	21.9	21.1	—	▲3.7
輸 入 量	2.7	2.7	3.3	—	20.2
期末在庫量	23.0	17.8	16.8	—	▲5.5
期末在庫率	40.0%	33.9%	32.8%	—	▲1.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	14.89	15.04	15.00	—	▲0.3
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.14	—	5.4

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)

図 米国の干ばつ状況(2022年5月10日時点)



< カナダ > 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ 45.9%増加

【生育・生産状況】カナダ統計局「Principals field crop areas ,March 2022」(2022.4.26)によれば、2022/23 年度の播種面積は、前年度に比べ、菜種、大麦等が減少し、小麦は増加する見込み。小麦全体の播種面積は、前年度に比べ 7.2%増加の 10.12 百万ヘクタールの見込み。そのうち、デュラム小麦は同 12.5%増加の 2.51 百万ヘクタール、春小麦は同 7.0%増加の 7.12 百万ヘクタール、冬小麦は同 13.0%減少の 0.49 百万ヘクタールの見込み。州別にはサスカチュワン州が、前年度に比べ 10.6%増加の 5.38 百万ヘクタール、アルバータ州では、同 6.3%増加の 3.00 百万ヘクタール、マニトバ州では、同 5.7%増加の 1.25 百万ヘクタール。

カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook For Principal Field Crops」(2022.5.20)によれば、生産量は、播種面積と単収(例年の水準を仮定)の増加から、カナダ西部で干ばつの被害があった前年度に比べ、45.9%増加の 31.6 百万トンの見込み。そのうち、デュラム小麦は、前年度に比べ、13.9%増加の 5.7 百万トン、普通小麦は同 37.2%増加の 25.9 百万トン。生育状況は、プレーリー(小麦生産地の平原三州)の南東部では土壤水分過多となり、一部低地で洪水が発生し、播種が遅延している。また、同南西部では干ばつが継続しているものの、西部の大部分では播種は例年のペースで進んでいる。

平原三州の各州政府によれば、サスカチュワン州では、十分な土壤水分量と土壤温度となっている圃場で乾燥天候に恵まれ播種作業が進展したものの、5月9日時点で春穀物の播種進捗率は14%と5年平均の23%を下回っている。また、アルバータ州では、5月10日時点で20%と平年を2ポイント下回った。マニトバ州では、5月10日時点で、作付け進捗率は1%と5年平均の21%を大きく下回った。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2022/23年度の輸出量は、前年度に比べ43.1%増加の21.9百万トン。そのうち、デュラム小麦は天候不順で収穫量の減少した北アフリカからの輸入需要増加から、前年度に比べ、91.3%増加の4.4百万トン、普通小麦は前年度に比べ34.6%増加の17.5百万トン。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022年3月の輸出量は普通小麦が0.8百万トン、デュラム小麦は0.2百万トンの計1.0百万トンで、輸出先国は、普通小麦はインドネシア(13.3%)、日本(13.2%)、アラブ首長国連邦(11.4%)、デュラム小麦は、モロッコ(35.6%)、日本(19.4%)の順。

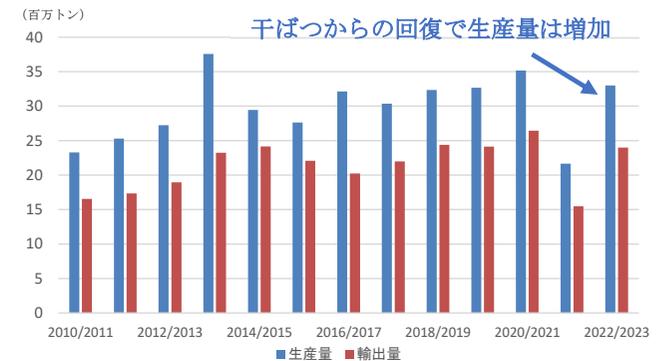
小麦—カナダ(春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.2	21.7	33.0 (31.6)	—	52.4
消費量	9.1	9.5	9.1 (8.4)	—	▲ 4.2
うち飼料用	4.2	4.5	4.0 (4.0)	—	▲ 11.1
輸 出 量	26.4	15.5	24.0 (21.9)	—	54.8
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	—	—
期末在庫量	5.7	2.9	3.4 (5.0)	—	17.1
期末在庫率	15.9%	11.7%	10.3% (16.5%)	—	▲ 1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.25	9.70 (10.00)	—	4.9
単収(t/ha)	3.51	2.34	3.40 (3.16)	—	45.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(20 May 2022)

図 カナダ産小麦の生産量、輸出量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2022.5.12)をもとに農林水産省で作成

表 カナダ産普通小麦及びデュラム小麦の輸出先国(2022年3月)

普通小麦			デュラム小麦		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
インドネシア	10.6	13.3	モロッコ	5.7	35.6
日本	10.5	13.2	日本	3.1	19.4
アラブ首長国連邦	9.1	11.4	アルジェリア	2.5	15.6
コロンビア	8.8	11.0	米国	2.2	13.8
エクアドル	6.9	8.7	ペルー	1.8	11.3
その他	33.8	42.4	その他	0.7	4.4
	79.7	100.0	計	16.0	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2: 普通小麦の: 品種はNO.1-3Canada Western Red Spring, No.2 Canada Prairie Spring, No.1Canada Western Red winter, No.2 Canada Eastern, Other, デュラムはCanada Western Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission 「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」(2022年4月25日)をもとに作成。

< 豪州 > 生産量は史上最高の前年度を17.4%下回る

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、史上最高となった前年度に比べ17.4%減少し、30.0百万トンとなるものの、10年平均(24.9百万トン)を上回る見込み。豪州は2年連続の豊作となったものの、2022/23年度は前年度に比べ、単収、収穫面積が減少する見込み。収穫面積の減少の主な理由は、肥料、燃料の価格高騰と一部での供給不足である。

豪州では、降雨に恵まれ出芽と発芽が進んでいる。豪州東部では、初期生育期の小麦は降雨に恵まれたものの、降雨で遅播きの播種は遅延した。また、同南部では、ほぼ好天に恵まれ、生長が促進されるとともに、遅蒔きの播種が進展した。

GIWA(西オーストラリア州穀物団体)(2022.5.13)によれば、西豪州の生産地は昨秋の降雨により十分な土壌水分となったことから、播種が順調に開始された。5月13日時点では、小麦の播種面積は2021/22年度並みの、4.95百万ヘクタールとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、生産量が減少することから、前年度に比べ12.7%減少するものの、史上第3番目となる24.0百万トンの見込み。豪州産は、特に、東南アジア市場からの強い需要がある。また、2021/22年度の実輸出量は、史上最高の生産量や、他の主要輸出国に比べ価格競争力があることから、前月予測からの変更はなく、27.5百万トンと史上最高となる見込み。なお、5月11日時点の豪州の輸出価格(FOB)は、インドとの競争から、4月6日時点の431ドル/トンから14ドル/トン低下し、417ドル/トン。

豪州統計局によれば、2022年3月の輸出量は、前月(2.83百万トン)に比べ2.61百万トンと減少した。同月の輸出先国は、中国(17%)、フィリピン(14%)の順。また、2022年1月から2022年3月までの輸出量は8.1百万トン。輸出先国は、中国(17.9%)、インドネシア(13.8%)、フィリピン(12.5%)、ベトナム(9.8%)の順で、それらの国の輸出量の合計は全体の54%を占める。

なお、2021/22年度に豪州産小麦に加え大麦、菜種が史上最高となったこと、その輸出時期が集中すること、北米産小麦の減産、ロシアのウクライナ侵攻による需要の集中から、輸出スロットの確保が難しい状況となっている。そのため、物流の遅延や混乱、輸入国の穀物輸入コストの増加が生じている。

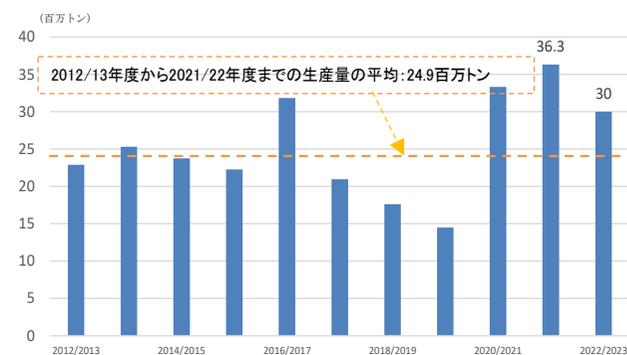
小麦—豪州 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	33.3	36.3	30.0 (27.8)	—	▲ 17.4
消費量	8.0	8.5	7.6 (8.7)	—	▲ 11.2
うち飼料用	4.5	5.0	4.0 (5.0)	—	▲ 20.0
輸出量	23.9	27.5	24.0 (22.5)	—	▲ 12.7
輸入量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	—	—
期末在庫量	4.3	4.8	3.5 (3.4)	—	▲ 28.0
期末在庫率	13.6%	13.4%	11.0% (10.9%)	—	▲ 2.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)※	12.90	13.00	12.90 (13.04)	—	▲ 0.8
単収(t/ha)	2.58	2.79	2.33 (2.79)	—	▲ 16.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

図 豪州産小麦の生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2022.5.12)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦輸出先国別輸出量

2022年3月			2022年1月~3月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
中国	44.1	16.9	中国	145.1	17.9
フィリピン	36.6	14.0	インドネシア	111.5	13.8
インドネシア	29.8	11.4	フィリピン	101.5	12.5
ベトナム	29.4	11.3	ベトナム	79.6	9.8
韓国	27.1	10.3	韓国	53.4	6.6
その他	94.6	36.2	その他	319.0	39.4
合計	261.6	100.0	合計	810.2	100.0

資料:豪州統計局のデータをもとに農林水産省で加工

< EU27+英国 >主要生産国のフランスの生産量は前年度に比べ減少

【生育・生産状況】欧州委員会によれば、EU27の2022/23年度の生産量は、前年度に比べ、0.1百万トン減少し138.7百万トンの見込み。そのうち、普通小麦はフランス等で減少したものの、ハンガリー、ドイツ等で増加したことから、前年度に比べ0.05百万トン増加し131.1百万トンの見込み。フランスは、単収は増加したものの作付面積が減少することから、生産量は前年度に比べ、3.9%減少の34.1百万トンの見込み。また、デュラム小麦はドイツ等で減少したものの、フランス、イタリアで増加したことから同0.2百万トン減少の7.6百万トンの見込み。

USDAによれば、英国は、前年度に比べ、0.4百万トン増加し14.4百万トン。

USDAによれば、2022/23年度のヨーロッパ全体の冬小麦の生育状況は、前年秋の播種以降、冬枯れもほとんどなく土壌水分も十分な状況であり良好。一方、英国、フランス、ドイツ北部では、小雨はあったものの、今後、乾燥が続くと見られ、生殖生長期にある小麦への影響懸念が高まっている。そのため、5月の降雨が必要とされている。イベリア半島では冬期及び春期の降雨で生長は良好であり、スペインでは、好天に恵まれたが高温となったため、生殖生長期から成熟期にかけての小麦の生長が早まった。また、欧州南部では温暖で、生殖生長期にある冬穀物の生長が促進された。

フランスアグリメール(2022.5.2)によれば、フランス産普通小麦、デュラム小麦とも出穂期に入ったが、前年度に比べると普通小麦の生育は早い、デュラム小麦は遅れている。同16日付けのフランス産の生育状況を示す「とても良い～良い」の割合は、乾燥天候の影響で、前週の83%から72%に低下し、前年度同時期の79%を下回った。今後の乾燥天候による作柄への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度のEU27の輸出量は、前年度に比べ、16.4%増加の36.9百万トンとなり、世界第2位となる見込み。フランス、ルーマニア、ドイツの豊作による輸出余力の増加や、減少したウクライナの輸出の代替として、サブサハラアフリカや中東から需要が高まっていることが輸出量増加の要因である。

なお、フランスアグリメール(2022.5.2)によれば、2021/22年度のフランス産普通小麦の輸出量は前月予測(9.5百万トン)から9.3百万トンに下方修正された。これは、中国のコロナウイルス封じ込め政策に伴う輸入量の減少と、小麦価格の高止まりが要因である。

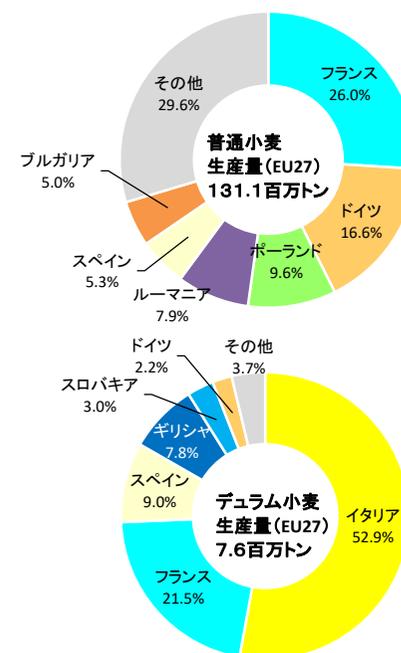
小麦－EU27+英国（冬小麦を主に栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	136.4	152.4	150.9 (150.1)	—	▲ 1.0
消費量	118.2	124.3	124.2 (119.9)	—	▲ 0.1
うち飼料用	48.5	53.4	52.2 (46.8)	—	▲ 2.2
輸 出 量	30.2	31.7	36.9 (38.6)	—	▲ 16.4
輸 入 量	8.6	6.8	7.0 (6.9)	—	▲ 2.9
期末在庫量	12.1	15.3	12.1 (13.9)	—	▲ 20.9
期末在庫率	8.2%	9.8%	7.5% (8.8%)	—	▲ 2.3

(参考)
 収穫面積(百万ha) 24.37 26.02 25.90 (25.55) — ▲ 0.5
 単収(t/ha) 5.59 5.86 5.83 (5.87) — ▲ 0.5
 資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 USDA 「World Agricultural Production」(12 May 2022)
 IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)
 ※表内のデータはEU27+英国

図 2022/23年度 EU27の普通小麦、デュラム小麦の国別生産量割合



資料: 欧州委員会「EU Cereals Production, Area, and Yield」(2022.4.28)をもとに農林水産省で作成

< 中国 > 小麦生産量は前年度に比べ0.1%減少の136.9百万トン

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.5.7)によれば、2022/23年度の生産量は、前年度に比べ0.1%減少の136.9百万トンの見込み。

作期別には、冬小麦は131.4百万トン(対前年度比0.1%減)、春小麦は5.5百万トン(同0.1%増)。なお、省別の生産量のシェアは、冬小麦が、河南省(28.8%)、山東省(20.0%)、安徽省(12.6%)、河北省(10.9%)。

一方、春小麦は冬小麦に比べ少ないものの、新疆地区、内モンゴル地区で生産されている。

2022/23年度の冬小麦の生育条件は、日照は平年並みで、多くの地域で土壌水分は十分であったものの、河南中北部と東部、山東省南部では降雨が少なく、土壌水分は不十分となった。また、中国中央気象台(5月8日)によれば冬小麦の生育段階は、華東地域の山東省で出穂期から開花期、安徽省等で開花期から乳熟期、華中地域の河南省で開花期、湖北省で乳熟期を迎えている。一方、春小麦は、全国の播種進捗率が80%を超えている。

なお、中国糧油情報センターによれば、前年度の秋の洪水により冬小麦の播種に遅れが発生したが、休眠期後の良好な天候と中央政府及び各地方政府の生産安定措置により、冬小麦の作柄は改善しつつある。全国の冬小麦の一、二類苗の比率は92.5%と、前年度同時期に比べ2.5ポイント低いものの、前月に比べ、6.7ポイント向上した。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、小麦輸入量は前年度(8.3百万トン)から6.0%減少し、7.8百万トンの見込み。中国海関統計によれば、2022年3月の小麦輸入量は、前年度同期(43.9万トン)を96.1%上回る86.1万トン。その要因は、春節シーズンのずれの影響で、2月は逆に輸入量が前年度を大きく下回った。2022年1月から3月の輸入量は、同(291.2万トン)を4.3%上回る303.6万トン。輸入先国は、豪州(52.5%)、フランス(37.5%)の順。なお、2022年1月から3月までの米国からの輸入量は446トンと前年度同時期(46.3万トン)に比べ大幅に減少している。また、ロシアからの輸入量は同0.1万トンと前年度同時期(0.2万トン)に比べ減少した。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年3月号」によれば、国内卸売価格は、2月末のロシアのウクライナ侵攻による国際小麦価格の急騰から、3月初めに国内小麦価格が大幅上昇。加えて、石油価格上昇による物流費の上昇で小麦粉加工業者の仕入れ価格が上昇し、全体的に前月に比べ大幅上昇。

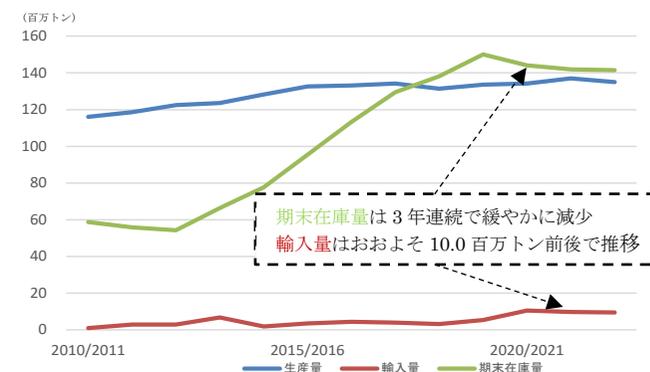
小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	134.3	137.0	135.0 (135.0)	—	▲ 1.4
消費量	150.0	148.0	144.0 (141.0)	—	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (26.5)	—	▲ 14.3
輸出量	0.8	0.9	0.9 (1.0)	—	5.9
輸入量	10.6	9.7	9.5 (9.4)	—	▲ 2.1
期末在庫量	144.1	141.9	141.5 (135.4)	—	▲ 0.3
期末在庫率	95.6%	95.3%	97.7% (95.3%)	—	2.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.40 (23.50)	—	▲ 0.7
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.77 (5.74)	—	▲ 0.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

図 中国産小麦の生産量、輸入量、期末在庫量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.5.12)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入先国(2022年3月、2022年1月~2022年3月、2021年1月~2021年3月)

(輸出量:百万トン、シェア%)

2022年3月			2022年1月~2022年3月			2021年1月~2021年3月		
国名	輸出量	輸出シェア	国名	輸出量	輸出シェア	国名	輸出量	輸出シェア
豪州	44.8	52.1	豪州	159.4	52.5	豪州	96.6	33.2
フランス	27.0	31.4	フランス	113.8	37.5	カナダ	77.2	26.5
カナダ	14.0	16.3	カナダ	29.6	9.8	フランス	58.6	20.1
ロシア	0.1	0.2	カザフスタン	0.5	0.2	米国	46.3	15.9
カザフスタン	0.1	0.1	ロシア	0.1	0.0	トアニア	6.6	2.3
その他	0.0	0.0	その他	0.0	0.0	その他	6.0	2.1
計	86.1	100	計	303.6	100	計	291.2	100

資料: 中国海関統計(2022.4.20)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 小麦輸出量は世界第1位

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前年度に比べ6.4%増加し、過去3番目に高い80.0百万トンの見込み。この増加は、収穫面積が前年度に比べ0.5%減少し、27.5百万ヘクタール(過去5年平均と同水準)となるものの、単収が同7%増加し2.91トン/ヘクタール(5年平均を2%上回る)となるためである。作期別の生産量は、冬小麦は58.5百万トン、春小麦は21.5百万トンの見込み。2022/23年度の冬小麦は、越冬期に地表が氷に覆われたため、越冬条件が良好で枯死が少なかった上に、越冬後の4月も十分な土壌水分に恵まれた。

なお、プーチン大統領は5月12日、2022/23年度の穀物生産量(クリミア地域を含む)は130.0百万トン、そのうち小麦は87.0百万トンになる可能性があるとして述べた。

2022/23年度の生育状況は、ロシアヨーロッパ部の北部(中央連邦管区等)では冬作物はおおむね例年並みで、4月20日までに越冬が終わり、再生長が始まった。また、4月上旬から春作物の播種が開始された。また、南部(南連邦管区等)では、冬作物は3月末までに越冬は終了し、4月は生長が進んだ。春作物は、南部から開始されていた播種が全域に広がった。

ロシア農業省の速報値によれば、春小麦の播種面積は、5月13日時点で4.34百万ヘクタール、播種進捗率は33%である。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前年度に比べ18.2%増加の39.0百万トンの見込み。輸出量の増加は、生産量の増加と輸出競合国であるウクライナがロシアによる侵攻で輸出量を減らすこと、比較的安価な黒海産小麦への世界の需要の強さが要因である。

また、ロシア産の輸出価格(FOB)は、経済制裁による決済での問題にもかかわらず輸出が継続しているため、前月(4月6日)から4ドル/トン上昇し、5月11日時点で399ドル/トンとなった。

現地情報会社によれば、4月の小麦輸出量は前年同期比69%増加し、平年並みの2.6百万トン。ロシア産は中近東、北アフリカ諸国に輸出されており、2022年4月の主な輸出先は、トルコ(38.2%)、イラン(25.1%)、エジプト(20.6%)の順。また、輸出量は、輸出数量制限が撤廃される7月以降に急増すると見られている。なお、対ロ制裁を科していないアルジェリア、エジプト、トルコ等は安定的にロシア産穀物の買付けを継続していると見られる。

小麦—ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培) (単位:百万トン)

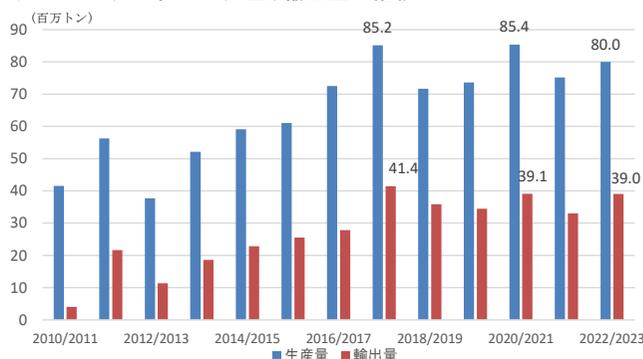
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	85.4	75.2	80.0 (82.5)	—	6.4
消費量	42.5	41.8	42.3 (44.3)	—	1.2
うち飼料用	19.0	18.5	19.0 (19.4)	—	2.7
輸出量	39.1	33.0	39.0 (34.3)	—	18.2
輸入量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	—	—
期末在庫量	11.4	12.1	11.1 (15.9)	—	▲7.9
期末在庫率	13.9%	16.2%	13.7% (20.3%)	—	▲2.5

(参考)

収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	27.50 (27.95)	—	▲0.5
単収(t/ha)	2.98	2.72	2.91 (2.95)	—	7.0

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

図 ロシア産小麦の生産量、輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2022.5.12)をもとに農林水産省で作成

表 ロシアの小麦輸出先国

2022年4月			2021年7月~2022年4月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)
トルコ	99.9	38.2	イラン	601.4	23.0
イラン	65.6	25.1	トルコ	566.5	21.7
エジプト	53.9	20.6	エジプト	462.7	17.7
アゼルバイジャン	0.9	0.3	アゼルバイジャン	89.0	3.4
イスラエル	0.8	0.3	サウジアラビア	71.5	2.7
その他	40.5	15.5	その他	822.9	31.5
計	261.6	100.0	計	2614	100.0

資料:ロシア税関統計をもとに農林水産省で作成

<ウクライナ> ロシアの侵攻により小麦の輸出量は前年度に比べ47.4%減少

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、ロシアのウクライナへの侵攻による収穫面積(対前年度比21.1%減)と単収(同17.3%減)の減少から、史上最高だった前年度に比べ34.9%減少し、21.5百万トンの見込み(過去5年平均より23%減)。

ウクライナ国家統計局によれば、2022/23年度の主要作の冬小麦の播種面積は前年度に比べ2.5%減少の6.54百万ヘクタール(クリミア及びドネツク州、ルガンスク州を含まず、現在の紛争地域のデータを含む)。一方、早期春穀物は5月12日時点で予定面積の約90%の播種が完了。そのうち、春小麦の播種面積は他の作物からのシフト等から前年度同時期に比べ増加し、18.75万ヘクタール(予定面積:18.96万ヘクタール)。また、同省によれば、紛争地域の農地破壊、耕作放棄面積(爆撃や地雷埋設等により農地に適さない土地や人手不足で放置される土地)は、全体の30%程度。

2022/23年度の小麦の生育状況(4月末現在)は、冬小麦が分けつ期から茎立期の初期、春小麦が出芽期~根茎形成期で、播種が早かった圃場ではすでに子葉形成期に入った。また、北部から西部の一部地域では播種作業が継続している。なお、2022/23年度は、肥料価格の高騰や、黒海の主要港の閉鎖による供給網の混乱から、施肥量が減少し、さらに収穫量が落ちる可能性がある。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、黒海の港湾がロシアの侵攻により閉鎖されたことや、生産量の減少により、前年度に比べ47.4%減少の10.0百万トンの見込み。

なお、海上輸送の代替として、鉄道利用による近隣ヨーロッパ諸国を通じての輸出方法が検討されている。フランスアグリメール(2022.5.11)によれば、陸路でポーランドへ運び、その後、ポーランド、ラトビア、リトアニアのバルト海沿岸からの輸出が想定されている。しかし、欧州委員会によれば、鉄道輸送には、レール幅の違いによる積み荷の詰替えが必要なこと、積替地での積替能力が小さい等の問題がある。また、ドナウ川経由の代替ルートは、港湾能力の問題から輸出ニーズのごく一部の対応に留まり、加えて、ロシア軍影響下の黒海北部の運行になるためリスクが高い。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2022年3月及び4月の輸出実績は侵攻前に比べ大幅に減少し、それぞれ3.3万トン(港湾98%)、0.9万トン(同81%)。2021年7月から2022年2月の小麦輸出量は18.1百万トンで、輸出先国はエジプト(15.1%)、インドネシア(14.7%)、トルコ(9.9%)等の順。

小麦-ウクライナ (主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	25.4	33.0	21.5 (19.4)	-	▲ 34.9
消費量	8.7	10.0	11.2 (8.7)	-	12.0
うち飼料用	2.6	4.0	6.0 (2.8)	-	50.0
輸出量	16.9	19.0	10.0 (11.0)	-	▲ 47.4
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
期末在庫量	1.5	5.6	6.0 (6.4)	-	7.1
期末在庫率	5.9%	19.3%	28.3% (32.6%)	-	9.0

(参考)
 収穫面積(百万ha) 6.85 7.41 5.85 (5.03) - ▲ 21.1
 単収(t/ha) 3.71 4.45 3.68 (3.86) - ▲ 17.3
 資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 「World Agricultural Production」(12 May 2022)
 IGC 「Grain Market Report」(21 April 2022)

図 ウクライナ産冬小麦の生産地域と紛争地域



資料: USDA「World Agricultural Production」(2022.5.12)

表 ウクライナ小麦輸出先国 (2022年2月、2021年7月~2022年2月)

2022年2月			2021年7月~2022年2月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出シェア (%)
エジプト	23.1	22.2	エジプト	273.8	15.1
トルコ	18.3	17.6	インドネシア	265.5	14.7
パキスタン	10.6	10.2	トルコ	178.7	9.9
イエメン	8.7	8.4	パキスタン	146.9	8.1
アルジェリア	7.7	7.4	サウジアラビア	75.1	4.1
その他	35.6	34.2	その他	871.3	48.1
計	104.0	100.0	計	1,811.3	100.0

資料: ウクライナ税関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

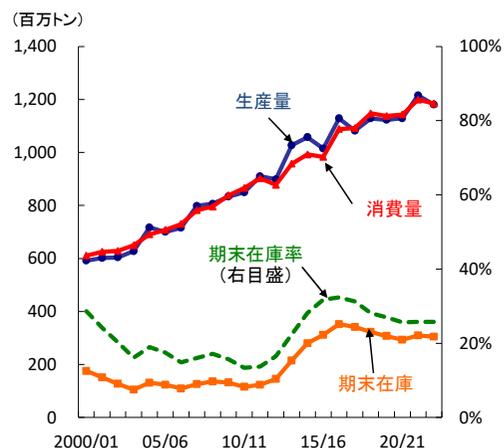
＜米国農務省（USDA）の見通し＞ 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 —
 ・ブラジル、アルゼンチン等で増加も、ウクライナ、米国、EU 等で減少し、前年度を下回る見込み。

消費量 前年度比 ↓ 前月比 —
 ・中国、ブラジル等で増加も、米国、ウクライナ等で減少し、前年度を下回る見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 —
 ・ブラジル、アルゼンチン等で増加も、ウクライナ、米国等で減少し、前年度を下回る見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 —



資料：USDA「PS&D」（2022.5.12）をもとに農林水産省にて作成

◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.0	1,215.6	1,180.7	—	▲ 2.9
消費量	1,143.3	1,199.4	1,185.0	—	▲ 1.2
うち飼料用	723.7	750.0	746.6	—	▲ 0.4
輸出量	183.0	197.8	182.7	—	▲ 7.6
輸入量	185.6	181.0	176.8	—	▲ 2.3
期末在庫量	293.2	309.4	305.1	—	▲ 1.4
期末在庫率	25.6%	25.8%	25.8%	—	▲ 0.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 May 2022）

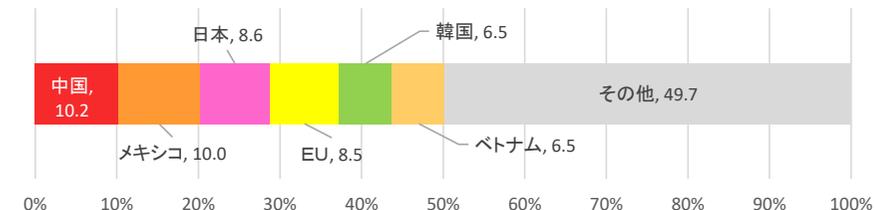
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,180.7百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(182.7百万トン)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(176.8百万トン)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

< 米国 > 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、肥料価格高騰の影響による中西部の主要生産州（アイオワ州、イリノイ州、ネブラスカ州等）での収穫面積の減少に加え、中西部の主要生産州で5月中旬まで作付けのペースが平年よりかなり遅れたことから2月のアウトルック・フォーラムでの予想単収から下方修正され、前年度より4.3%減の367.3百万トンの見込み。

USDA「Crop Progress」(2022.5.16)によれば、5月上旬までの中西部の低温で雨がちな天候により、主要18州における作付け進捗率は49%と、前年度同期(78%)及び過去5年平均(67%)より大幅に遅れている。発芽率も14%と前年度同期(38%)及び過去5年平均(32%)より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、エタノール用需要が米国内のガソリン需要が前年度に比べ横ばいと予想から前年度と変更がない一方、飼料用需要が生産量の減少、国内価格の上昇等から減少することから、前年度より2.2%減の309.0百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の減少に加えて、世界的な価格高騰による多くの国での需要の抑制、一定の国内需要があること等から、前年度より4.0%減の61.0百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～5月5日)は、24.8百万トンであり、内訳は中国(6.9百万トン)、メキシコ(5.6百万トン)、日本(4.7百万トン)、コロンビア(2.0百万トン)の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前年度より5.6%減の34.5百万トンの見込み。なお、期末在庫率は9.3%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし—米国

(単位：百万トン)

年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	358.5	383.9	367.3	—	▲ 4.3
消費量	306.5	315.9	309.0	—	▲ 2.2
うち飼料用	142.2	142.9	135.9	—	▲ 4.9
エタノール用等	127.8	136.5	136.5	—	—
輸出量	69.9	63.5	61.0	—	▲ 4.0
輸入量	0.6	0.6	0.6	—	—
期末在庫量	31.4	36.6	34.5	—	▲ 5.6
期末在庫率	8.3%	9.6%	9.3%	—	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.56	33.06	—	▲ 4.3
単収(t/ha)	10.76	11.11	11.11	—	—

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



＜ ブラジル ＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、本年9月以降作付けが開始される2022/23年度の実産量は、収穫面積及び単収の増加により、前年度より8.6%増の126.0百万トンとなり、史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.5.12）によれば、2021/22年度の実産終盤の夏とうもろこしの生産量は、2020/21年度比0.2%減の24.7百万トンの見込み。

一方、生育期を迎えた冬とうもろこしの生産量は、マツト・グロッソ州など中西部の主産地では乾燥が続く一方、南部産地ではおおむね良好な天候に恵まれ、干ばつ・霜害の影響で大幅減産となった2020/21年度に比べ44.2%増の89.9百万トンの見込み。

夏作・冬作の合計では2020/21年度比31.6%増の114.6百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆—ブラジルのクロープカレンダー参照）。

南部のパラナ州で5月9日現在、夏とうもろこしの収穫は終了。同州では冬とうもろこしの85%が生殖生長段階に入っている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で5月12日現在、夏とうもろこしの収穫進捗率は86%。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、飼料用消費の増加に伴い、前年度より5.5%増の77.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、生産量の増加に伴い、前年度より5.6%増の47.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～4月の輸出量は4.2百万トンで、前年同期（3.5百万トン）と比べ18.7%増となっている。内訳は、1位がエジプト101万トン、2位がイラン86万トン、3位が韓国58万トン。4月の輸出量は69万トンで、前年同月（13万トン）と比べ、5.3倍。ロシアのウクライナ侵攻の影響により、ウクライナ産の市場シェアが低下したことで、ブラジル産の中東向け輸出が増加した。なお、5月23日、ブラジル農務省は中国政府とブラジル産とうもろこしについて検疫問題をクリアし対中輸出の合意に至ったと公表した。

とうもろこし—ブラジル

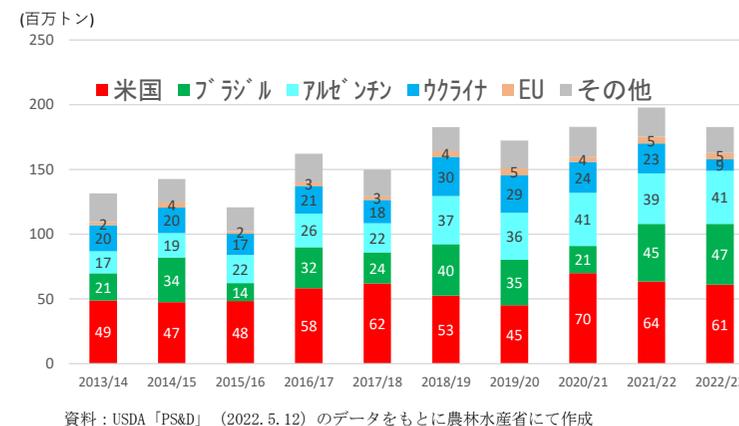
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	87.0	116.0	126.0 (123.1)	—	8.6
消費量	70.0	73.0	77.0 (78.6)	—	5.5
うち飼料用	59.5	62.0	65.5 (56.5)	—	5.6
輸 出 量	21.0	44.5	47.0 (43.6)	—	5.6
輸 入 量	2.9	2.0	1.3 (0.5)	—	▲ 35.0
期末在庫量	4.2	4.7	8.0 (8.4)	—	71.0
期末在庫率	4.6%	4.0%	6.4% (6.9%)	—	2.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.45)	—	4.1
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55 (5.74)	—	4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



< アルゼンチン > 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDA によれば、本年9月以降作付けが開始される2022/23年度の生産量は、単収の増加により、前年度より3.8%増の55.0百万トンと史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報(2022.5.19)によれば、2021/22年度の収穫進捗率は27%で、中央部と南部で進展しているものの、大豆の収穫作業を優先させているため過去5年平均より9ポイント遅れている。作柄は良からやや良が77%と前週(76%)からわずかに改善している。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、飼料用消費の増加に伴い、前年度より2.2%増の14.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の増加に伴い、前年度より5.1%増の41.0百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～3月の輸出量は6.8百万トンで、前年同期(5.7百万トン)より20.0%増。内訳は、1位がベトナム84万トン、2位がペルー79万トン、3位が韓国69万トン。輸入国での新型コロナウイルス感染症に対するロックダウンや巣ごもりなどの規制の緩和等により輸出は前年に比べ好調である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019年12月14日、輸出税を約7%から12%へ引き上げ、その後継続している。

2021年12月17日、アルゼンチン農牧漁業大臣が2021/22年度のとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。同省プレスによれば、とうもろこしの輸出上限数量は4,160万トンとしている。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	52.0	53.0	55.0 (63.7)	—	3.8
消費量	13.5	13.7	14.0 (25.0)	—	2.2
うち飼料用	9.5	9.8	10.0 (20.0)	—	2.0
輸 出 量	40.9	39.0	41.0 (41.0)	—	5.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	—	—
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (1.8)	—	—
期末在庫率	2.2%	2.8%	2.7% (2.7%)	—	▲ 0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.55	7.00	7.00 (8.40)	—	—
単収(t/ha)	7.94	7.57	7.86 (7.58)	—	3.8

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

写真:北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの生育風景
(5月2日撮影)

前年12月下旬に作付けされ、成熟期を迎えている。
収穫作業は6月を予定。



< 中国 > 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、政府補助金による大豆奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積が減少することから、前年度より0.6%減の271.0百万トンの見込み。

中国中央气象台週報（2022.5.9）によれば、5月8日時点で春とうもろこしの全国の播種率は7割を超えている。なお、南部の四川省、貴州省等では、三葉期から節間伸長期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より21.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～3月の輸入量は7.1百万トンで、前年同期比で5.5%増。内訳は、ウクライナ産4.0百万トン（56%）、米国産3.0百万トン（42%）。ウクライナ産については、2月下旬のロシア侵攻前に黒海から出荷されたとうもろこしとみられている。

5月23日には、中国政府は、ブラジル産とうもろこしについても検疫問題をクリアし輸入の合意に至ったと公表した。ウクライナ産とうもろこしの調達が難しくなったことが背景にあるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年3月号」によると、3月の国内流通価格は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、東北・華北のとうもろこし産地の通常の売買が制限され、とうもろこしの物流にも支障が発生し、2,880元/トンと前月（2,820元/トン）からやや上昇した。また、3月の外国産価格は、ロシアのウクライナ侵攻が続いており、ウクライナのとうもろこし作付面積は減少すると予想されることから、3,060元/トンと前月（2,640元/トン）から大幅に上昇し、国内価格を上回った。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

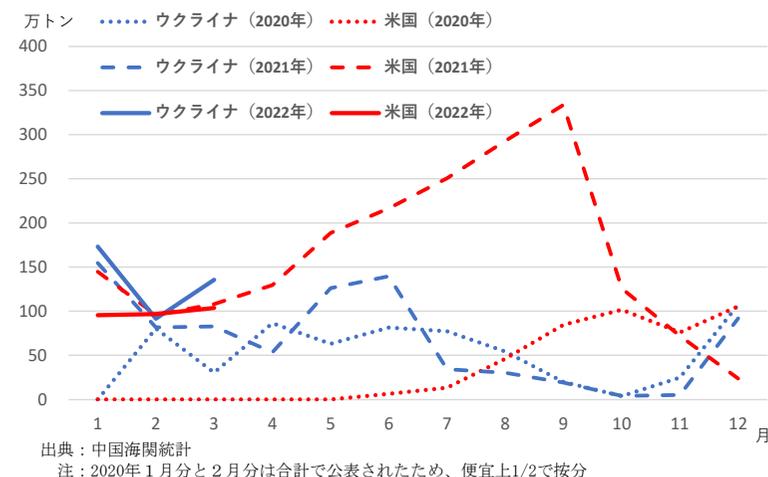
とうもろこし—中国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	260.7	272.6	271.0 (273.0)	—	▲ 0.6
消費量	285.0	291.0	295.0 (305.2)	—	1.4
うち飼料用	203.0	209.0	214.0 (203.0)	—	2.4
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	—	-
輸 入 量	29.5	23.0	18.0 (24.0)	—	▲ 21.7
期末在庫量	205.7	210.2	204.2 (180.0)	—	▲ 2.9
期末在庫率	72.2%	72.2%	69.2% (59.0%)	—	▲ 3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00 (42.50)	—	▲ 0.7
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.30 (6.42)	—	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

図：中国におけるウクライナ・米国産とうもろこしの輸入状況



< ウクライナ > ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実生産量は、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、史上最高の生産量となった前年度より53.7%減の19.5百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、5月12日時点の2022/23年度の播種済面積は3.2百万ヘクタールで前年同期（5.5百万ヘクタール）より減少している。

なお、USDA「Feed Outlook」（2022.5.16）によれば、アゾフ海を含むウクライナの海岸沿いをロシアに押さえられ、ロシアに占領されていないニコラエフ港やオデッサ港からの輸出も封鎖されている。このため、穀物を鉄道でポーランドやルーマニア経由で少量を輸出するしかないため、穀物の輸出が制限されてしまう。この結果、在庫水準がまれにみる高水準となり、備蓄能力を圧迫させてしまう。在庫過多によるウクライナ国内の穀物価格低下と輸出能力の不確かさで農家の作付け意欲は低下する。さらに、種子、肥料、燃料、貸付の不足やインフラの被害から穀物生産の単収と面積の両方が減少してしまう。また、とうもろこしはウクライナでは国内需要が少なく、輸出中心の換金作物で、投入コストに影響を受けやすい作物である。窒素肥料の不足により、ウクライナの実産者はとうもろこしから、油糧種子や他の作物（そば、ミレット、ジャガイモなど）に作付けを転換するとみられる。この結果、収穫面積は前年度に比べ、36.2%減と小麦や大麦など他の穀物より面積の減少率が大きい。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、生産量の大幅な減少に伴い、前年度より30.3%減の9.2百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、ロシアの侵攻以降黒海の港が閉鎖された影響等から、前年度より60.9%減の9.0百万トンの見込み。この輸出量は、紛争以前の潜在的な輸出可能量の三分の一以下となっている。

ウクライナ農業政策食料省によれば、3月1日～5月9日の輸出実績は1.0百万トン。3月は18万トン（96%が鉄道利用）、4月は60万トン（72%が鉄道利用）となっている。

とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)

年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)	
生産量	30.3	42.1	19.5 (18.6)	—	▲ 53.7	
消費量	7.1	13.2	9.2 (8.8)	—	▲ 30.3	
うち飼料用	5.9	12.0	8.0 (5.5)	—	▲ 33.3	
輸出量	23.9	23.0	9.0 (16.6)	—	▲ 60.9	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	—	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	6.8	8.1 (4.8)	—	▲ 19.2	
期末在庫率	2.7%	18.7%	44.3% (18.9%)	—	▲ 25.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	3.50 (3.30)	—	▲ 36.2	
単収(t/ha)	5.62	7.68	5.57 (5.64)	—	▲ 27.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要 (詳細は右表を参照)

<米国農務省 (USDA) の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比 **—**

- ・中国、インド、バングラデシュで増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

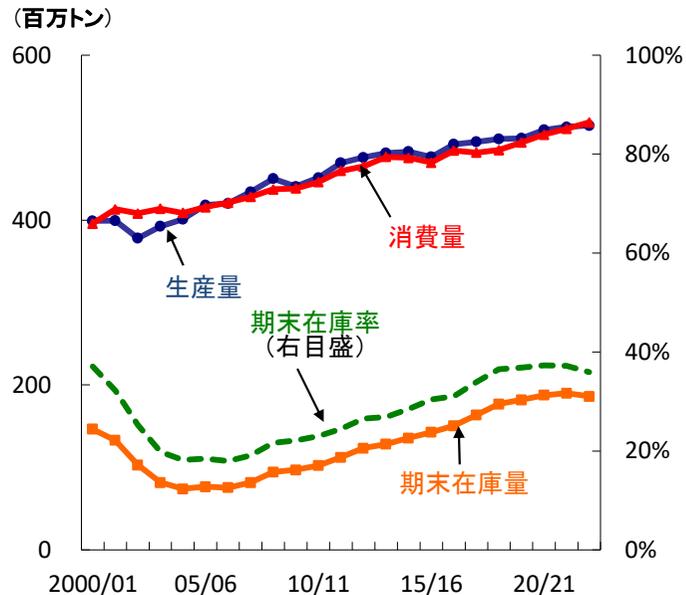
消費量 前年度比 前月比 **—**

- ・インド、中国等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比 **—**

- ・インド、タイ等主要アジア諸国で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比 **—**



資料：USDA「PS&D」(2022. 5. 12)をもとに農林水産省にて作成

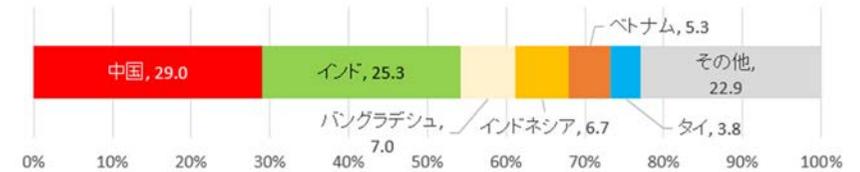
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

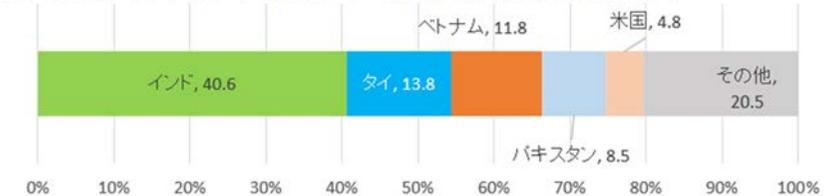
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	512.9	514.6	—	0.3
消 費 量	503.6	510.6	518.4	—	1.5
輸 出 量	50.9	52.6	54.2	—	3.0
輸 入 量	46.5	52.0	52.7	—	1.4
期末在庫量	187.8	190.1	186.3	—	▲ 2.0
期末在庫率	37.3%	37.2%	35.9%	—	▲ 1.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 May 2022)

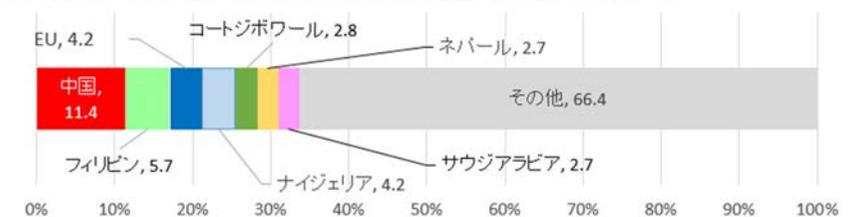
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(514.6百万トン)(単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.2百万トン)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(52.7百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 2年連続生産量・輸出量ともに減少

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、収穫面積の減少（対前年度比4.0%）や単収の低下（対前年度比1.4%）から、対前年度比4.8%減の5.8百万トンの見込み。このうち中・短粒種の生産量は、全体の約23%を占めるものの、11%以上減少して、1988/89年度以来の最低水準となる見込み。

同「Crop Progress」（2022.5.16）によれば、主要生産6州の作付け進捗率は80%で、過去5年平均（79%）より1ポイント進展しているものの、発芽進捗率は同平均（60%）より7ポイント低い53%となっている。これはアーカンソー州とミズーリ州で、度重なる降雨により作付けが遅れたため、発芽も遅れているもの。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、供給量の減少により、対前年度比3.0%減の4.5百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、輸出余力の減少と輸出価格の上昇が予想されることから、対前年度比3.7%減の2.6百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、タイ産ジャスミン米やインド産バスマティ米の輸入が引き続き増加すること、中国からプエルトリコ（米国領土）向け中・短粒種米の輸入が増加することにより、中・短粒種米の輸入が史上最高になると見込まれることから、対前年度比10.0%増の1.2百万トンと、史上最高となる見込み。

同「Rice Outlook」（2022.5.16）によれば、5月10日時点の地中海向けカリフォルニア米（1等、砕米4%混入）の価格は、前月から145ドル上昇して、1,365ドル/トンと過去最高。5月10日までの週のイラク向け長粒種（2等、砕米4%混入）は、前月から10ドル上昇し、675ドル/トン（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメー米国

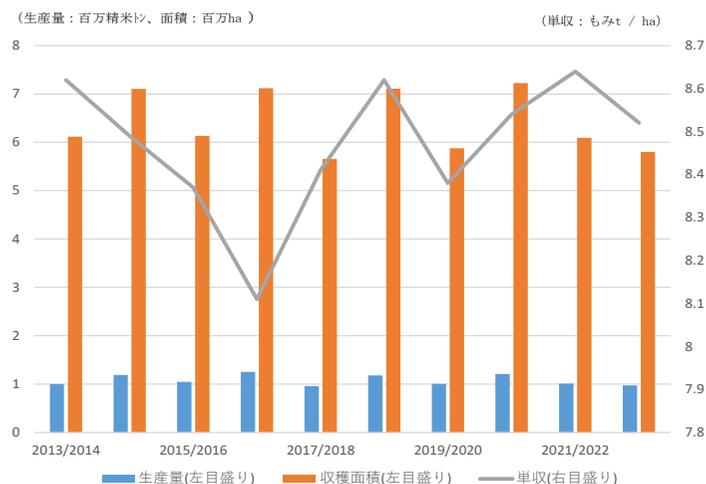
主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

(単位：百万精米トン)

年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.8	—	▲ 4.8
消費量	4.9	4.7	4.5	—	▲ 3.0
輸出量	3.0	2.7	2.6	—	▲ 3.7
輸入量	1.1	1.1	1.2	—	10.0
期末在庫量	1.4	1.2	1.1	—	▲ 11.8
期末在庫率	17.8%	16.1%	14.7%	—	▲ 1.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.97	—	▲ 4.0
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.52	—	▲ 1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 May 2022）

図：米国の生産量・面積・単収の推移(過去10年間)



資料：USDA「PS&D」（2022.5）をもとに農林水産省にて作成

< インド > 輸出量は世界全体の約 41%

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、史上最高の単収により、2021/22年度から1.0百万トン増加して、対前年度比0.8%増の130.0百万トンと、7年連続で史上最高を更新する見込み。「Grain: World Markets and Trade」(2022.5.12)によると、農業投入財への投資の促進により単収が一層向上した。

6月のモンスーンの到来を待って、カリフ米の作付けが開始される。

なお、インド農業・農民福祉省の2021/22年度第3回食料穀物生産事前推計(2022.5.19)によると、生産量の合計は129.0百トンで、目標値の121.1百トンを上回る見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、対前年度比3.4%増の107.0百万トンで、史上最高の見込み。インド政府の低所得世帯向け食料配給プログラム等で、生産が減少する小麦からコメへの配給比率引上げが予想されていることが主な要因。インドは中国とともにコメの二大消費大国。

USDA「Rice Outlook」(2022.5.16)によれば、2022/23年度の輸出量は、史上最高の生産量や価格競争力から、22.0百万トンと、前年度を4.8%上回り、史上最高となる見込み。輸出シェアは世界全体の約41%を占め、2位以下の輸出国(タイ、ベトナム、パキスタン)の合計量を上回り、世界最大のコメ輸出国となる見通し。

なお、インド商務省によると、2021年4月～2022年2月の輸出量の合計は19.1百万トン、主要輸出先はバングラデシュ(1.6百万トン)、中国(1.4百万トン)、ベナン(1.3百万トン)、ネパール(1.3百万トン)である。

USDAによると、2022/23年度の期末在庫量も、引き続き記録的な生産量が見込まれることから、1.0百万トン増加し、史上最高の42.5百万トンの見込み。期末在庫量のシェアは、世界全体の2割強を占める見通し。

インド産米(碎米5%混入)の5月10日までの週の価格は、前月から1トン当たり10ドル下落して350ドル/トンと、アジアの主要輸出国の中で最も低い価格となっている。(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)

コメーインド

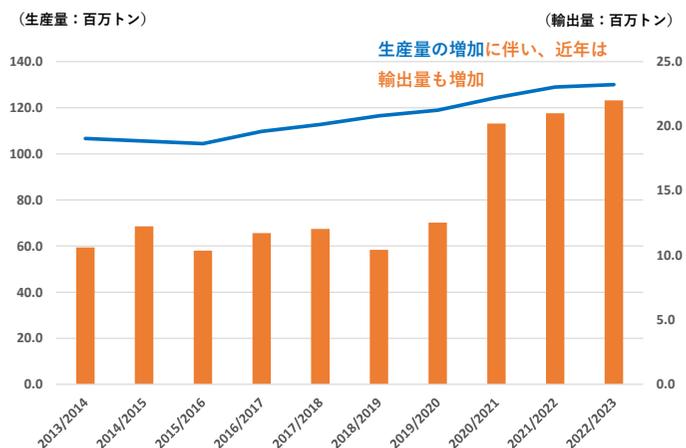
雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	124.4	129.0	130.0 (129.5)	—	0.8
消費量	101.1	103.5	107.0 (108.0)	—	3.4
輸出量	20.2	21.0	22.0 (19.3)	—	4.8
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	—	—
期末在庫量	37.0	41.5	42.5 (39.9)	—	2.4
期末在庫率	30.5%	33.3%	32.9% (31.3%)	—	▲ 0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	45.77	47.00	47.00 (46.00)	—	—
単収(もみt/ha)	4.08	4.12	4.15 (2.82)	—	0.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022) (単収は精米t/ha)

図：インドの生産量・輸出量の推移(過去10年間)



資料：USDA「PS&D」(2022.5)をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 生産量・消費量・輸入量がともに史上最高

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前年度をわずかに上回って149.0百万トンとなり、史上最高の見込み。

中国中央气象台（2022.5.10）によれば、2022/23年度について、全国早稲の移植は既に終了し、一期作米の移植は1割を超えている。二期作早期米は、福建地区は移植から分けつ期、広東、広西地区は分けつから節間伸長期、その他の地域も概ね分けつ期を迎えている。また、一期作米は、黒竜江地区は三葉期、吉林地区は播種から出苗期、遼寧地区は三葉から活着期、安徽、四川、雲南、貴州地区では概ね三葉期に入っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、対前年度比0.7%増の156.6百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしなど飼料用穀物の価格高騰を背景に、低価格の砕米を飼料用として輸入・消費している。

2022/23年度の輸入量は、こうした飼料用低価格砕米の輸入増加により、前年度から0.8百万トン増加して、6.0百万トンと、史上最高となる見込み。

なお、中国海関統計によれば、2022年1～3月の輸入量は、対前年同期の1.4百万トンから約17%増の1.7百万トン。輸入先はパキスタンが0.5百万トン、インドが0.5百万トン。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、史上最高の生産量と輸入を上回る、消費の増加により、前年度末から4.0百万トン減少して、109.0百万トンの見込み。なお、世界の期末在庫量シェアのうち、中国が6割弱を占める見通し。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	148.3	149.0	149.0 (149.8)	—	0.0
消費量	150.3	155.4	156.6 (151.8)	—	0.7
輸 出 量	2.2	2.3	2.4 (2.5)	—	6.7
輸 入 量	4.2	5.2	6.0 (4.0)	—	15.4
期末在庫量	116.5	113.0	109.0 (107.0)	—	▲ 3.5
期末在庫率	76.4%	71.7%	68.6% (69.3%)	—	▲ 3.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00 (30.03)	—	0.3
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.10 (4.99)	—	▲ 0.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」 (12 May 2022)

IGC 「Grain Market Report」 (21 April 2022) (単収は精米t/ha)

写真：黒竜江省の水稲育苗風景

(5月2日撮影。5月中旬以降移植予定)



＜ タイ ＞ インドに次ぐ世界第2位のコメ輸出国に

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度（2023年1月～同年12月）の生産量は、収穫面積の拡大に伴い、対前年度比0.8%増の19.8百万トンの見込み。

2021/22年度（2022年1月～同年12月）の生産量は、前年度に比べて収穫面積と単収の増加により、対前年度比4.2%増の19.7百万トンの見込み。季節外れの降雨により、40℃近い気温による暑さが緩和された。乾季作の収穫が続いており、5月中旬時点で、収穫面積の25～30%が残っている。

モンスーンの到来を受けて、雨季作の作付けが開始された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の増加に伴い、対前年度比7.1%増の7.5百万トンの見込みで、インドに次ぐ世界第2位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22年度の輸出量は、イラク、アフリカ、中国、米国向けの輸出が予想よりも好調なことから、0.2百万トン上方修正され、対前年度比15.5%増の7.0百万トンとなる見込み。

タイ米輸出業協会（2022.5）によれば、2022年1～3月の輸出量は1.7百万トンで、前年同期の1.2百万トンから48.5%増加した。対前年同期比でイラクが約2000倍、米国が約1.5倍、中国が約2倍となっている。

USDA「Rice Outlook」（2022.5.16）によれば、5月10日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、4月5日までの週の価格から34ドル上昇し、2021年6月中旬以来の高値である458ドル/トンとなっている（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。サブサハラアフリカ、中国、イラクから予想を上回る需要があるため、ここ1か月でタイのコメ輸出価格は、ほとんどの精米のグレードで8%ほど上昇。

コメ・タイ

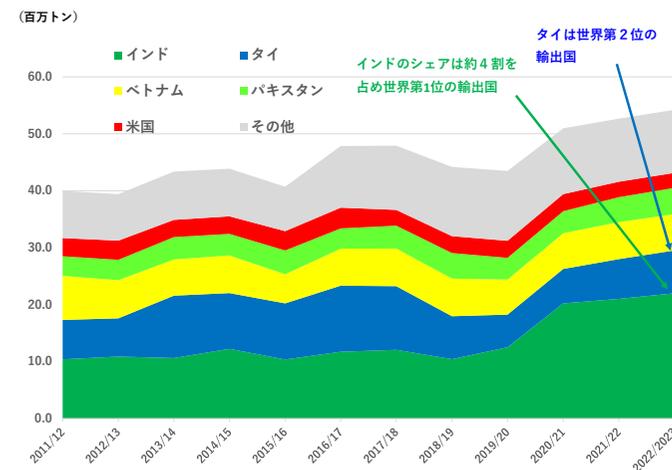
夏の雨季作と冬の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			対前年度 増減率(%)
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更		
生産量	18.9	19.7	19.8 (20.0)	—	0.8	
消費量	12.7	13.0	13.1 (12.1)	—	0.8	
輸出量	6.1	7.0	7.5 (7.9)	—	7.1	
輸入量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	—	-	
期末在庫量	4.3	4.1	3.5 (6.9)	—	▲ 14.5	
期末在庫率	22.8%	20.7%	17.1% (34.7%)	—	▲ 3.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.51	10.59	10.70 (10.50)	—	1.0	
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.80 (1.90)	—	▲ 0.4	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)（単収は精米t/ha）

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.5)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 2021/22 年度の冬春作の収穫が終了し、夏秋作の作付け開始

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度（2023 年 1 月～同年 12 月）の生産量は、単収が 6.01 トン/ヘクタールと過去最高になることから、対前年度比 0.3%増の 27.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度（2022 年 1 月～同年 12 月）の生産量は、単収はわずかに増加しているものの、収穫面積が引き続き漸減していることから、対前年度比 0.2%減の 27.3 百万トンの見込み。

最も生産量の多い冬春作の収穫が終了し、夏秋作の作付けが開始されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、タイおよびインドとの競争激化により、対前年度比 1.5%減の 6.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸出量は、対前年度比 3.2%増の 6.5 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年 1～3 月の輸出量は 1.5 百万トンであり、上位からフィリピン（0.7 百万トン）、コートジボワール（0.2 百万トン）、中国（0.2 百万トン）となっている。うちジャポニカ米は 4.3 万トン。

USDA 「Rice outlook」（2022.5.16）によれば、最近収穫された冬春作のベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 5 月 10 日までの週の価格は、4 月中旬に最大輸出先国であるフィリピンからの需要が減少したため下落したものの、5 月第 2 週に 420 ドル/トンと、再び 4 月初旬の水準まで戻った。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位：百万精米トン)

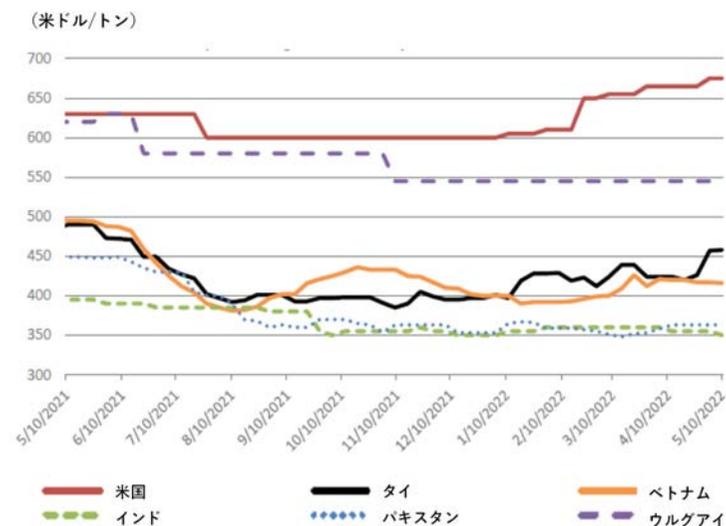
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	27.4	27.3	27.4 (28.9)	—	0.3
消費量	21.5	21.5	21.6 (23.5)	—	0.2
輸出量	6.3	6.5	6.4 (6.5)	—	▲ 1.5
輸入量	1.8	0.8	0.6 (1.0)	—	▲ 25.0
期末在庫量	2.6	2.8	2.8 (3.2)	—	1.8
期末在庫率	9.5%	9.9%	10.1% (10.5%)	—	0.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.30	7.29 (7.28)	—	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	6.00	5.99	6.01 (3.98)	—	0.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 May 2022）
IGC 「Grain Market Report」（21 April 2022）（単収は精米t/ha）

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」（2022.5.12）

II 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比 **—**

・ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、米国等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

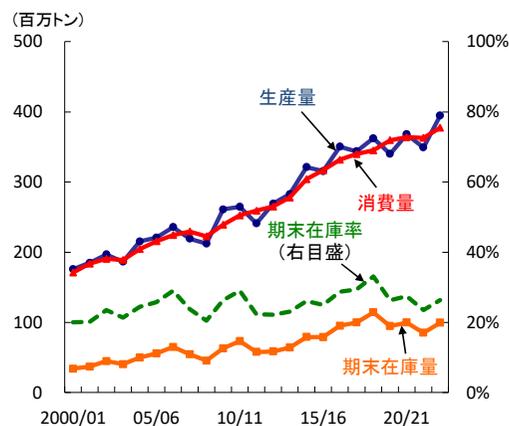
消費量 前年度比 前月比 **—**

・中国、パラグアイ、ブラジル等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比 **—**

・ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比 **—**



資料：USDA「PS&D」（2022.5.12）をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

(単位：百万トン)

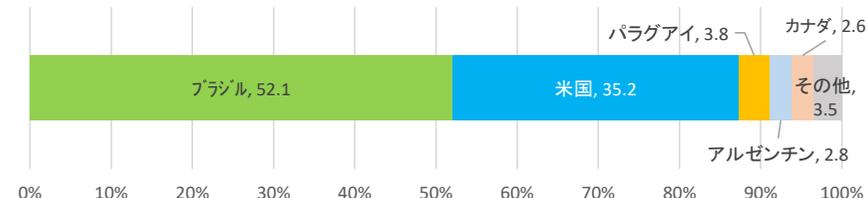
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	368.1	349.4	394.7	—	13.0
消費量	363.8	362.9	377.4	—	4.0
うち搾油用	315.1	313.7	326.8	—	4.2
輸出量	164.5	155.6	170.0	—	9.3
輸入量	165.5	154.5	167.1	—	8.2
期末在庫量	99.9	85.2	99.6	—	16.8
期末在庫率	27.5%	23.5%	26.4%	—	2.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 May 2022）

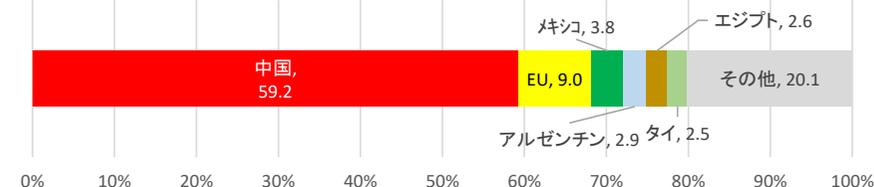
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (394.7 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (170.0 百万トン)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (167.1 百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 生産量は史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、肥料価格高騰を背景に、とうもろこしと比べ大豆は肥料の投入量が少ないことから収穫面積の増加により、前年度より4.6%増の126.3百万トンと史上最高の見込み。

USDA「Crop Progress」(2022.5.16)によれば、5月上旬までの中西部の低温で雨がちな天候により、主要18州における作付け進捗率は30%と、前年度同期(58%)及び過去5年平均(39%)より大幅に遅れている。発芽率も9%と、前年度同期(19%)及び過去5年平均(12%)より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、大豆粕と大豆油の需要の高まりに伴う旺盛な搾油用需要から、前年度より2.1%増の64.8百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前年度より2.8%増の59.9百万トンの見込み。2022/23年度の米国の収穫が始まる2022年10月頃までは南米の大豆在庫は逼迫が予想され、輸入国は米国の輸出に大きく依存するが、南米からの新穀供給が可能となる2023年初頭以降は米国の大豆輸出は反動で減少するとみられる。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～5月5日)は、16.9百万トンであり、内訳は中国(8.2百万トン)、メキシコ(1.7百万トン)、エジプト(1.6百万トン)、インドネシア(0.8百万トン)、日本(0.7百万トン)の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、生産量の増加が消費量・輸出量の増加を上回ることから、前年度より31.9%増の8.4百万トンの見込み。なお、期末在庫率は6.8%で、前年度を上回るものの、依然として低水準の見込み。

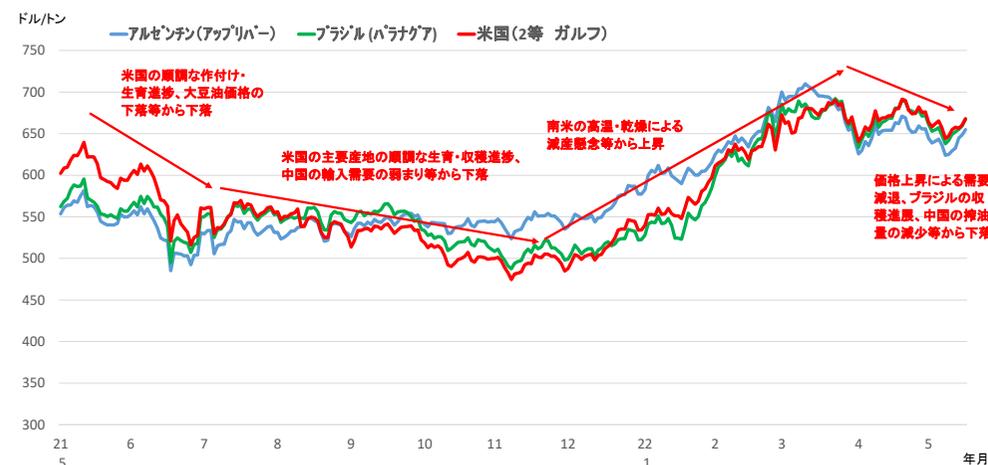
大豆－米国

(単位：百万トン)

年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	114.8	120.7	126.3	—	4.6
消費量	61.1	63.5	64.8	—	2.1
うち搾油用	58.3	60.3	61.4	—	1.8
輸出量	61.5	58.2	59.9	—	2.8
輸入量	0.5	0.4	0.4	—	-
期末在庫量	7.0	6.4	8.4	—	31.9
期末在庫率	5.7%	5.3%	6.8%	—	1.5

(参考)
 収穫面積(百万ha) 33.43 34.94 36.46 — 4.4
 単収(t/ha) 3.43 3.45 3.46 — 0.3
 資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 「World Agricultural Production」(12 May 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格(FOB)の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2021/22 年度の収穫終盤、高温・乾燥で減産見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、本年10月以降に作付けが開始される2022/23年度の生産量は、収穫面積及び単収の増加から、前年度より19.2%増の149.0百万トンと史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2022.5.12)によれば、2021/22年度の実生産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受け、前年度より10.4%減の123.8百万トンの見込み。

最大生産州である中西部マット・グロソ州では例年より早く収穫が終了。南部のパラナ州でも5月9日現在、収穫は終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、旺盛な搾油用需要から、前年度より2.7%増の52.1百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の増加に伴い、前年度より6.9%増の88.5百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～4月の輸出量は30.4百万トンで、前年同期(31.5百万トン)に比べ3.5%減となっている。内訳は、1位が中国22.3百万トン、2位がスペイン1.6百万トン、3位がタイ0.9百万トンとなっている。なお、4月の輸出量は11.5百万トンで前年同月(16.1百万トン)と比べ、28.8%減となっている。例年より収穫の遅れが目立った前年と異なり、本年は年初から輸出が順調であったため、4月の輸出量は前年より低い数量となった。

大豆—ブラジル

(単位：百万トン)

年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23			
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)	
生産量	139.5	125.0	149.0 (140.5)	—	19.2	
消費量	49.9	50.8	52.1 (48.8)	—	2.7	
うち搾油用	46.7	47.5	48.8 (46.0)	—	2.6	
輸出量	81.7	82.8	88.5 (88.3)	—	6.9	
輸入量	1.0	0.5	0.8 (0.2)	—	66.7	
期末在庫量	29.4	21.4	30.5 (6.5)	—	42.8	
期末在庫率	22.4%	16.0%	21.7% (4.7%)	—	5.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	39.20	40.80	42.00 (40.70)	—	2.9	
単収(t/ha)	3.56	3.06	3.55 (3.45)	—	16.0	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)

2021/22年度	2021年												2022年											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9			
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等		作付 4.6(百万ha)										収穫 24.7(百万t)									→ 収穫夏冬計 114.6百万t		
冬とうもろこし	作付面積夏冬計 21.5百万ha ←												作付 16.9(百万ha)			収穫 89.9(百万t)								
大豆	マット・グロソ州、パラナ州等												大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし播種									↑		
	作付 40.9(百万ha)												収穫 123.8(百万t)											

資料：CONAB穀物レポート(2022.5.12)

< アルゼンチン > 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、本年11月以降作付けが開始される2022/23年度の生産量は、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より21.4%増の51.0百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22年度の実績は、生育期の高温・乾燥の影響で、2020/21年度より9.1%減の42.0百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報(2022.5.19)によれば、2021/22年度の収穫進捗率は78%で、過去5年平均より7ポイント遅れている。作柄は良からやや良が66%で前週(67%)からわずかに悪化。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の増加に伴い、前年度より2.3%増の48.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の増加に伴い、前年度より70.9%増の4.7百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～3月の輸出量は1.4万トンで、前年同期(3.8万トン)より62.1%減。内訳は、1位がチリ1.1万トンとなっている。ブラジルの収穫が遅れた前年に比べ、隣国ブラジルで収穫が予定通りに進んだために、前年に比べ輸出が減少した。

アルゼンチンは、大豆輸出量よりも、搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定。さらに、2022年3月19日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げ、大豆と横並びの33%と変更した。

大豆ーアルゼンチン

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	46.2	42.0	51.0 (47.1)	—	21.4
消費量	47.4	47.2	48.3 (47.3)	—	2.3
うち搾油用	40.2	40.0	41.0 (41.3)	—	2.5
輸 出 量	5.2	2.8	4.7 (4.1)	—	70.9
輸 入 量	4.8	2.2	4.8 (4.6)	—	118.2
期末在庫量	25.1	19.3	22.1 (2.6)	—	14.5
期末在庫率	47.6%	38.6%	41.7% (5.1%)	—	3.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	16.47	16.00	17.00 (16.50)	—	6.3
単収(t/ha)	2.81	2.63	3.00 (2.85)	—	14.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

写真:北部サンタフェ州の大豆の収穫風景
(4月25日撮影)



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、政府の補助金による大豆奨励策から主に収穫面積の増加により、前年度より6.7%増の17.5百万トンの見込み。

中国中央气象台週報（2022.5.9）によれば、5月8日時点で、全国の播種率は2割を超えている。なお、主産地の東北地区で播種期から出苗期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、国内大豆粕需要の回復による搾油用消費量の増加から、前年度より6.3%増の115.6百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、搾油用消費量の増加に伴い、前年度より7.6%増の99.0百万トンの見込み。

なお、2021/22年度の輸入量は、中国の一人当たり消費量及び人口増加見通しの上方修正を反映し、前月予測から1.0百万トン上方修正し、92.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～3月の輸入量は20.3百万トンと、前年同期比で4.2%減。内訳は、米国産13.4百万トン（66%）、ブラジル産6.4百万トン（31%）。前年同期は米国産の輸入が9割を占めていたが、2022年はブラジル産の輸入シェアが高まっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年3月号」によると、3月は、天候が暖かくなり、各地で旬の野菜が次々と出荷され、一部の大豆制品の需要を代替したため、産地市場における大豆売買が低調であった一方で、新型コロナの状況が厳しく物流費が高騰したために消費地の売買も低調であった。このため、全体的に市場価格は平穏ではあったが、3月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,500元/トン）から横ばいの6,500元/トンで、依然として高水準で推移している。3月の外国産価格（山東省の輸入大豆価格）は、南米産大豆の減産やロシアのウクライナ侵攻の影響を受けた穀物価格等の高騰を背景に、5,320元/トンと前月（5,040元/トン）から大幅に上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

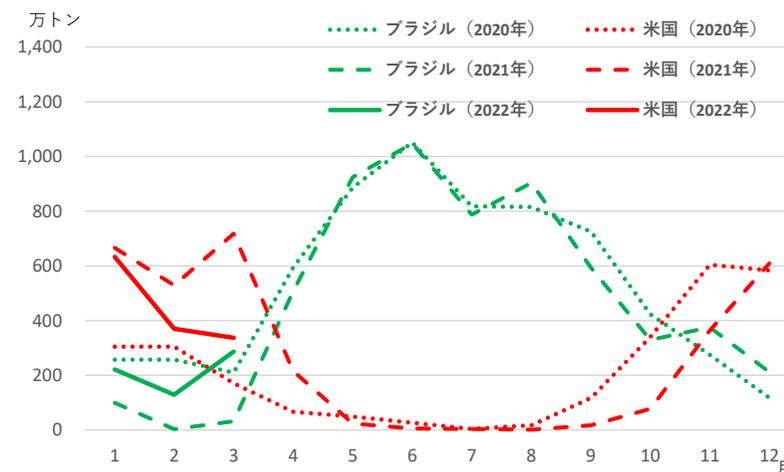
大豆—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	19.6	16.4	17.5 (17.5)	—	6.7
消費量	112.7	108.7	115.6 (115.0)	—	6.3
うち搾油用	93.0	89.0	95.0 (96.5)	—	6.7
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	—	—
輸 入 量	99.8	92.0	99.0 (98.0)	—	7.6
期末在庫量	31.2	30.8	31.6 (28.9)	—	2.6
期末在庫率	27.6%	28.3%	27.3% (25.1%)	—	▲ 1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	8.90 (8.90)	—	6.0
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97 (1.97)	—	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2022)
IGC「Grain Market Report」(21 April 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積の増加により増産、輸出量も増加見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、単収は減少するものの、収穫面積の増加から、前年度より0.4%増の6.3百万トンの見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, March 2022」(2022.4.26)によれば、2022/23年度の作付意向面積は、前年度より0.7%増の2.2百万ヘクタールの見込み。最大の生産州であるオンタリオ州では、前年度より3.2%増の1.3百万ヘクタールの見込み。

また、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.5.20)によれば、2022/23年度の生産量は、上記の作付意向面積と過去5年平均単収を前提とすれば、前年度より2.0%増の6.4百万トンの見込み。なお、オンタリオ州では天候に恵まれ、作付けが順調に進展している。マニトバ州を含む平原南東部では洪水や水分過多により作付けが遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前年度より0.9%増の2.4百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前年度より6.0%増の4.5百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2021/22年度(2021年8月～2022年7月)のうち、2021年8月～2022年3月の輸出量は259.9万トンで、国別では、イラン(47.1万トン)、イタリア(34.6万トン)、オランダ(22.6万トン)、アルジェリア(21.9万トン)、中国(21.2万トン)の順。

大豆—カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.4	6.3	6.3 (6.4)	—	0.4
消費量	2.7	2.3	2.4 (2.4)	—	0.9
うち搾油用	1.6	1.8	1.8 (1.9)	—	—
輸出量	4.5	4.2	4.5 (4.5)	—	6.0
輸入量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	—	▲ 2.0
期末在庫量	0.3	0.5	0.5 (0.4)	—	▲ 3.8
期末在庫率	4.1%	8.1%	7.4% (5.1%)	—	▲ 0.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.20 (2.17)	—	3.3
単収(t/ha)	3.12	2.94	2.86 (2.96)	—	▲ 2.7

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 May 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(20 May 2022)

写真：カナダ中東部オンタリオ州の大豆の作付け風景
(5月8日撮影)



(参考)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。

例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。

なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)